

オーストラリアにおけるライフセービング事情

Life Saving in Australia

洲 雅 明

Masaaki Suga

【はじめに】

平成11年9月26日から平成12年3月24日まで、文部省在外研究員として、オーストラリア(豪州)へ行く機会を得た。そのうち約4ヶ月にわたり、クイーンズランド州(QLD)サンシャインコーストで調査研究を実施した。テーマは「水辺活動を中心としたスポーツ環境と安全についての研究」で、ここでは主にサーフライフセービングに関して調査を行った。

ライフセービングとは、訳語を当てはめると「人命救助」となるが、一般的には「水辺の事故防止のための実践活動」と理解されている。しかし、ライフセービング活動の実際は、「人命救助を本旨とした社会的活動」として世界的に活動が行われている⁵⁾。

そのライフセービングの歴史は、豪州が起源とされている。1838年に定められた「日中の海水浴は風紀を乱すという理由から禁止する」という法律を撤回するために集まったボディ・サーフィンの愛好家たちが設立したクラブが、ライフセービングの始まりである。その初のライフセービングクラブは、1906年にシドニーのボンダイビーチに設立された。その活動によって、海水浴禁止の法律は廃止されることになったものの、解禁後に水難事故が後を立たなかったため、ライフセービング活動がその後発展していったのである。現在では、豪州全土に270のクラブ、会員数は76,000人、救助された人数は年間11,000人(1999~2000年シーズン)にのぼる活動になっている^{1) 4)}。

豪州は日本と同じように四方を海に囲まれた国で、日本の22倍という国土面積を持つ。気候帯も北部の熱帯、内陸部の乾燥、南部の温帯と多様である。サンシャインコーストは、亜熱帯に属しQLD南部に位置する。州都ブリスベンの北側100キロの所にオージー(Aussie、オーストラリア人)に人気のリゾート地サンシャインコーストがある。

ビーチが50キロにわたって続き、海水浴は年間の半分が可能なこの地域で、海は観光客にも、地元民にも大変身近な存在である。ここでは、サーフィンをはじめ様々なマリンスポーツが、川や湖を含め1年中実施されている。そんな土地柄、この地域には、15のサーフクラブ(サーフライフセービングの拠点)が点在している。

このような地域で、サーフライフセービングを中心に安全管理体制はどのように行われているのか、地域での位置付けはどのようなものかを中心に調査を行った。

【調査方法】

豪州におけるサーフライフセービングに関しては、渡豪前からインターネットを利用して、豪ライフセービング⁴⁾ 及びQLDライフセービング³⁾ のホームページで概要を把握した。

渡豪中には、サンシャインコーストでは最大規模のMooloolaba（ムルーラバ）サーフクラブにてライフセービング活動の観察、インタビューなどの調査を行った。他にもサンシャインコースト内のサーフクラブを数ヶ所調査した。

【調査概要】

1. サーフライフセービングクラブについて

サーフライフセービング活動は、サーフライフセービングクラブ（以下サーフクラブ）を中心に実施されているが、その役割は単にそれだけではない。ムルーラバビーチには、QLDサーフライフセービング協会サンシャインコースト支部の中で、最大規模のサーフクラブ（写真1）があり、そこは、ビーチの社交場として地域住民で毎日賑わっている。ビーチに面しているところが多く、レストラン、バー、スロットなどのゲームがある。天気がいい時は、オープンカフェで潮風を浴びながら食事することも可能である。しかし、ビーチの傍だからといって、ランニングや裸足での入場は禁止である。特に夜は食事をしたり、お酒を飲むことが中心なので、ドレスレギュレーションが必要である。と言っても、サーフクラブ自体は堅苦しい所ではなく、地元の人が気軽に集うところで、ビールはグラス一杯が150円程度と手頃である。サーフクラブの運営は、地域住民が支払う20ドル（約1,500円）の年会費とスポンサー収入で賄われている。それはまた、ビーチの安全のための資金源にもなっている。だから、サーフクラブ内には、レスキューボードやサーフスキー、IRB（Inflatable Rescue boats：モーター付きのゴムボート）を収納する艇庫もあり、サーフライフセービングの拠点にもなっているのである。ちなみに会員数は、このクラブで2,000人程である。

この他に、ムルーラバサーフクラブは、心肺蘇生法や講習会などを開催できるルーム、スポーツクラブ並のウェイトトレーニングルームも有していた。

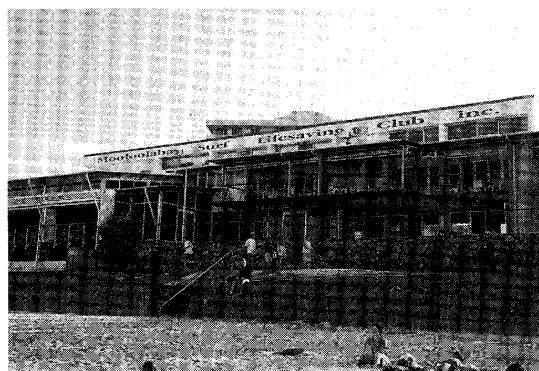


写真1 サーフライフセービングクラブの建物

2. パトロールビーチの様子

ビーチが続き海へのエントリーが容易であっても、そこが遊泳に適していると言うわけではない。豪州のビーチはほとんどが外洋に面していて、波がかなり高いので、サーフクラブを中心としたビーチで遊泳に適した場所を選び、そこを遊泳区域としている。いわゆるパトロールビーチと言われるところで、そこで海水浴を楽しむように呼びかけが行われている。

海岸の入り口には、大きな看板（写真2）が設置され、注意事項や砂浜に立てられた数色の

フラッグの意味が記されている。サンシャインコースト一帯ではこのフラッグの意味の表示が、英語とともに日本語でも表記されている。これは、溺れる大半は観光客で、その内日本人が占める割合がかなり高いからである。そして、英語表記の意味を理解できずに、事故に遭うことが多いからである。旗にはそれぞれ次のような意味がある。

- * 上半分が赤、下半分が黄色のフラッグー「旗と旗の間で泳いでください」
- * 緑のフラッグー「水泳に安全な場所」
- * 黄色のフラッグー「気をつけて泳いでください」
- * 赤のフラッグー「危険！水泳禁止」
- * 青のフラッグー「モーターボートやサーフボードは旗の外でご使用ください」

実際砂浜には、上半分が赤で下半分が黄色のフラッグが数十メートル間隔で2本立っていて、その中央に緑（または黄色）の旗が、そして両方の外側には、青の旗が立っていた（写真3）。このように、砂浜のある海岸線は続いているものの、遊泳区間とされているのは、数十メートル区間で、その区間はライフセーバーの監視下にあるのである。区間の決め方は、離岸流がないか、刻々と変化する海底から危険な波が起こっていないか、サメなどの危険な生物がいないかなどにより判断を行う。しかし、日本のように、海の中にブイを浮かべ遊泳区間を制限するようなことは行っていなかった。地元紙によるとこれを現在検討しているとのことである。

遊泳区間を示すフラッグの中央には、ライフセーバーが待機できるようテントが配置されていた。黄色地に赤でSURF RESCUEと書かれており、その中にはサングラスをかけたライフセーバーが2～3人いた。やはり黄色地に赤で文字が書かれたTシャツを着ており、このデザインがライフセービングのカラーだというのが一目瞭然である。そのほとんどが長袖であり、日本よりも遥かに強い紫外線（皮膚ガンの原因）から皮膚を守るためである。ライフセーバーに限らず、オーギーはサングラスや日焼け止めをよく利用して人体を保護している。

砂浜に降りる手前の右手側には監視塔（写真4）があり、2～5人で監視している。塔の下には、ビーチコンディションを書いたポ

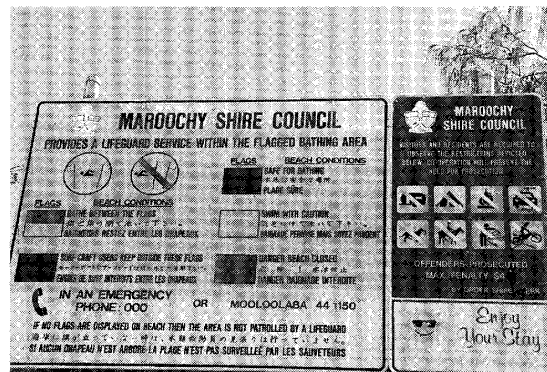


写真2 ビーチ入り口にあるフラッグの説明



写真3 ビーチに立つフラッグの位置

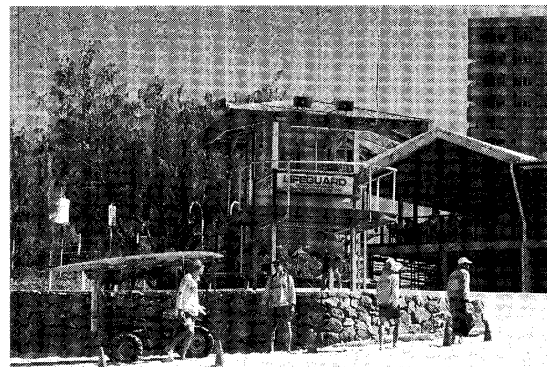


写真4 ビーチにある監視塔

ードが置いてあり、満潮、干潮の時刻、天候、風向き、ビーチの状態、リップエリア、気温、水温、パトロールの時間帯などが記してある。10月頃は緑旗が多かったものの、真夏は天候不順で黄色旗の状態も多かった。水温は、10月も真夏の1月も22~24度と日本の海に比べると低いことが多かった。

3. ビーチのパトロールについて

ビーチパトロールは、QLDで9月中旬から5月上旬まで行われている。朝は早く7時半からパトロールを開始、夕方は春で4時半終了、夏場や土日は少し延長して行われていた。

ビーチによって、ライフセーバーや海水浴客の数との関係で、パトロールの人数はかなり違っていた。ムルーラバビーチでは、夏の週末時の人出が多いときには、赤黄のフラッグ間を中心に10人以上の監視体制が取られていた。

ムルーラバクラブには、ライフセーバーが350人程登録していて、そのうちブロンズメダリオンという資格保持者が250人程存在する。男女比は半々ぐらいで、ニッパーという子供の登録が350人いる。年齢構成は未確認であるが、ある程度の年齢以上になるとパトロールは行わず無線やクラブ運営に携わるそうだ。

4. ブロンズメダリオン資格取得講習会

ブロンズメダリオンという資格取得は、ライフセーバーになるための第一歩である。この資格がないと、豪州では正式にビーチパトロールを行うことができない。

クラブに所属する15歳以上で400mを9分以内で泳ぐことができれば、この資格に挑戦することができる。試験ではビーチを200m走り、200m泳ぎ、また200m走るのを8分以内で行う必要がある。その他に、サーフやIRBの知識を有し、溺者の救助、運搬、心肺蘇生法、無線の操作を修得する必要がある。この講習会は各サーフクラブで認定員の指導の元で行われている。ムルーラバサーフクラブでは平日の夜間に週1回1時間半ほど心肺蘇生法、週末朝9時~10時半にビーチでの救助法が行われていた。受講者は10代から中年の男女まで幅広い年齢層であった。

ビーチでの講習会は、200mラン、200mスイム、200mランで開始される。ウォーミングアップを兼ね、それが試験科目だからであろう。その後、いくつかのグループに分かれて、溺者救助の基本的技術であるレスキューチューブ、サーフボード、IRBでの救助法、運搬法(写真5)を練習していた。

心肺蘇生法の講習会は、日本の各団体と同じようにダミー人形を使って行うのであるが、手技自体が少し異なっていた。まず、傷病者の身体を横に傾け、気道確保、呼吸の確認を行い、それから仰向けに戻して人工呼吸を開始する。その際は頬で鼻を押さえ鼻をつままない場合がほとんどであった。心臓マッサージは、胸に置いた手のほうをまっすぐに伸ばし体重をその腕一本にかけて圧迫していた。もう片方の手は手首を握るだけであった。



写真5 ブロンズメダリオン講習会の様子

これらの講習会は、日本で行われる講習会に比べると気楽な雰囲気、開始と終了も明確ではなかった。また、全体説明もほとんどなく、指導者5名程が、受講生4～5人に付いて指導していた。

パトロール中は、ほとんど複数で救助する事ができるためか、2～5名のグループで救助するトレーニングが大半を占めていた。心肺蘇生法も2人で行うのが主体であり、海での救助も複数で素早く砂浜まで救助して、他の救助者が救命具を取りに走るといった内容が中心であった。

5. 実際の救助現場の様子

ビーチにいた時に、偶然、実際の救助現場に遭遇した。ビーチ周辺を監視していた2人のライフセーバーが、IRBまで走ってきたかと思うと、さっと乗り込み、エンジンをかける。そして、海水浴客を避けるために、迂回して沖へ出て行く。到着したIRBが人を引き上げているのがビーチからも見える。事故は、波打ち際から40～50mぐらいのところだったので、その側にはレスキューボードに乗っているライフセーバーがいたのも確認できる。あらかじめボードで海の中をパトロールしていたようであり、そのライフセーバーが救助したようである。それらの連携でIRBは2分程でビーチまで戻ってきた(写真6)。

ビーチでは既に他のライフセーバーが待ち構えている。幸いなことに、IRBで救助された溺者には意識がある。50歳ぐらいの中年男性で、ビーチに到着した後、数分間人工呼吸機から酸素を吸入していた。この男性は、赤黄色フラッグの間で遊泳していたようであった。

IRBによる救助は動力を利用するにもかかわらず、小回りが利くので素早い。これによる救助の割合は、全救助の約30%であり、ボードに次ぐ割合である⁴⁾。このトレーニングは、日常でもブロンズメダリオン資格取得の講習会でも行われていた。

以下に、ムルーラバサーフクラブが所有し、実際のパトロールや救助に利用する器具や道具の種類と数を示す。これらは、主にサーフクラブ内にある倉庫に収納されている。

サーフボード—83

サーフボート(5人乗りの競技用)—5

IRB—5

モーター—7

モーターバイク(砂浜移動用)—2

小型トラクター—1

ジェットスキー—1

シングルスキー—96

ダブルスキー—11

細動除去器—2(1台5,000ドル)

フラッグやレスキューチューブ—多数



写真6 IRBでの救助の様子

6. サーフスポーツについて

ライフセービングは、競技スポーツとしても世界的に行われている。これは、一刻を争うライフセービング技術を、その普及と共に、競技として互いの技術力を競い合うことから発展していった。よって、競技種目は、実際の救助に要求される要素がベースとなっていて、実際のビーチパトロールに携わっているライフセーバーのみが参加できる^{2) 5)}。

サンシャインコースト支部の大会である「カラウンドラ・サーフ・クラシック」をDickyビーチへ観戦に行った時の競技種目は、スイム、スキー（シングル、ダブル、リレー）、ボード（写真7）、タプリン、チューブ、アイアンマン、ボードレスキュー、ビーチフラッグ、ビーチリレーであった。それらの競技が男女別に16歳以下、18歳以下、21歳以下、オープンに分かれていて、2日間でぎっしりビーチを埋め尽くす。このような競技会が、夏期に頻繁に行われている。

競技開始前から、各クラブのロゴ入りのカラフルで大きなテントが砂浜でひしめき合っている。スポンサーもその名前が何社も掲げられていて、日本でもおなじみのケロッグはメインスポンサーのひとつである。また、翌朝の地方紙一面には、カラー写真付きで結果が掲載されるほどの熱の入れ様である。会場には、特設の実況中継塔も建てられていた。

競技は年齢別に途切れることなく実施され、ライフセービング競技の華であるアイアンマンレースは特別迫力があつた。スイム、サーフボード、サーフスキーの3種目を一人で行う競技であるが、運動強度的にもかなり高いであろうと感じた。また、サーフスキーで大きな波を越えて沖へ出ていくのは、タイミングを取る技術が必要で、失敗すると一瞬にして横転していた。日本でもおなじみのビーチフラッグは、競技時間が短いので、スタート時の集中からフラッグ（実際はチューブ）を奪取するまで、目が離せないレースである。

ライフセーバー達は、日常からトレーニングを頻繁に行っている。朝、夕のボード、サーフスキーなどのトレーニング、近くのプールでのスイムトレーニングは滞在中、頻繁に見ることができた。また、大規模なサーフクラブにはスポーツクラブ並みのウェイトトレーニング施設も整っている。

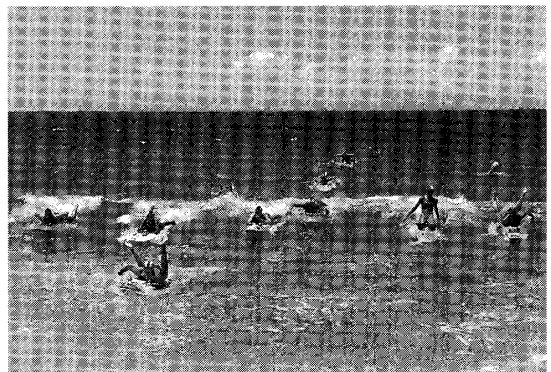


写真7 ボード競技の様子

7. ニッパーとJr.ライフガードクリニック

ニッパーと呼ばれる子供たちのライフセービング活動(主に啓蒙活動のためのトレーニング)が、多くのサーフクラブで日曜早朝に行われている。

いくつかの年齢別グループに分かれて行われ、砂浜では指導員からビーチフラッグを習っているグループがいる。別のグループは、荒波の中をスイム。そして別のグループは、サーフボードで沖へ向かってパドリング。その日のビーチにはイエローフラッグが立っていて、海は荒れているにも関わらずその活動ぶりはかなり逞しいものであつた。しかし、たくさんの指導員が蛍光色のシャツを着て海の中に入っており、しっかりと監視や指導が行われている。他のスポーツもそうであるが、豪州の子供のスポーツには厳しさは見られない。歓声や笑い声が絶えず、外から見ても楽しんでいるのが伝わってくる。

サーフでの活動ではないが、サンシャインコーストのヌーサアクアティックセンターでは、夏休みを利用してJr.ライフガードクリニックが行われていた。募集はプールに置いたチラシなどで行われていた。期間は火曜から金曜までの計4回で、時間帯は10時半から12時まで。募集年齢は7～13歳で、20人程が参加していた。料金は1回3.5ドル（約250円）。指導者は2人で、チーフはこのプールのプログラム・コーディネーターという身分であつた。

見学時の内容は、前半がダミーを使っての心肺蘇生法で、ブロンズメダリオン講習会で行われていた内容とほぼ同じであった。しかし、ほとんどの子供はすでにこの知識や技術を知っているようで、復習的に進められていた。後半は、プールで浮き具を投げたりして、泳がないで救助する練習が行われた。少し説明があった後、2人1組の片方がプールに入っていくのだが、水深2mのプールに何のためらいもなく全員が飛び込んでいくのには驚きであった。立ち泳ぎ自体はそれほど上手ではないのだが、顔を上げたまま5m程離れたところに泳いでいって容易に浮くことができる。後は交代でビート板やひもで結ばれたペットボトルなどを投げて、遊び感覚で救助の練習を行っていた。ここ以外にもいくつかのプールを見ることができたが、小さなプールでも必ず深い部分(1.8m以上)があるのが豪州の特徴で、飛び込みも条件付きで可能である。このような環境が、深いプールでの浮遊を可能にしているのだと感じた。

8. 水の安全に関する組織・団体

豪州には、サーフライフセービング協会とは別にロイヤルライフセービング協会がある。サンシャインコーストの場合、ビーチが数多くあり、年間通じて海水浴客も多いので、サーフの方が目立つ存在であった。

各サーフクラブの他に、サーフライフセービング協会のサンシャインコースト支部がある。ディレクターのKen O'connell氏にお会いして、本報告でも大変役立ったトレーニングマニュアル⁷⁾や年間レポート⁸⁾等の貴重な資料を収集することができた。地方紙のコラムには、O'connell氏の名前で頻繁に「Between the Flags」という題名のビーチでの安全を呼びかける内容が掲載されていた。

一方、ロイヤルライフセービング協会にもサンシャインコースト支部が存在する。サーフが海でのライフセービング活動なのに対し、ロイヤルは海以外のプールや湖、池、川でのライフセービング活動を展開している。サンシャインコースト支部のディレクターであるRussel Green氏の自宅に支部が置かれている。家の奥には、縦15m(水深1.5m)程のひょうたん型のプールがあり、そこで水泳指導(スイミングスクール)を行っている。ここでもマニュアル⁹⁾や年間レポート⁶⁾等を収集することができた。

豪州第2の都市メルボルンには、大変立派なプールがあり、そこではロイヤルライフセービングの有資格者がプール監視を行っていた。日本のプールと異なるのは、公営で大きな競技会が可能なプールでも、他のスペースには大人から子供までが利用できる大きな遊泳用のプールがあることだ。このプールでは30分おきに大きなウェーブが起きたり、泡や噴水が水面からあがったりする。大人も利用できる超迫力のウォーターライダーがあり、長蛇の列ができる。アクアビクスレッシンもあり、それが終わるとそこには20m程の大きなフロートが出現、順番に子供たちがフロートの上で歓声をあげている。高さ3mの飛び込み台にも列ができ、思い思いのフォームで飛びこんでいく。こんな多機能なプールなので、監視体制もただプールサイドの監視台からだけというわけにはいかない。ウェーブの時間になると一面が見渡せる高いところに立ち、溺者を見つけたら救助用の巾着袋を投げ入れるように構えている。フロートの周りにはレスキューチューブをもった監視員がいる。飛び込み台の上にも安全を確認して合図を出す人がいる。多機能で楽しいプールであるが、それだけに監視体制も重要だと感じた。

他に、AUSTSWIMという組織がある。これは、水泳の初心者指導と安全プログラムを指導する組織なのであるが、水泳協会、水泳指導者協会、サーフ、ロイヤルなどと相互に協力が行

われている。各プールやスイミングスクールの広告には、「AUSTSWIMの資格取得コーチ在籍」などの文句がよく記載されている。

その講習会を11月半ばにブリスベンのサニーバンクスイミングで見学させてもらった。受講者は水泳指導者の他、プール従事者、看護婦、教員など30名程であった。講習料（テキスト代含）は、2～3日間の講習会で220ドルである。内容は、教室での講義やグループディスカッションの後、日本でもよく行われているような救助法や飛び込みの指導法などが行われた。特に変わった内容はなかったものの、ここでも受講者は足のつかない深いプールで、全員が実技を行っていた。このような講習会が、QLDで年間40回程各地で実施されているということである。

【今後の展望】

豪州、特にQLD州サンシャインコーストで調査したライフセービング活動は、歴史もあり地域住民に認知されている活動である。同じように四方を海に取り囲まれ、海水浴も各地で行われている日本にとって、また海での水難事故が後を絶たない日本にとって、このような活動は必要不可欠である。しかし、そのままのスタイルを取り入れることは、風土や国民性、制度上困難である。

近年では、このような活動の必要性を感じているボランティア団体を中心に、中には行政も含めて様々な海岸でライフセービング活動が実施されている。日本にもライフセービング協会が設立されていて、62団体、約4,000人の登録がある。

今後、日本においてライフセービング活動が、さらに発展して、水への安全対策が充実していくよう、調査から考えられる範囲で展望を示してみた。

1. 世界的に歴史もあり、進歩している豪州のライフセービングの知識や技術を、日本に紹介して、日本に合った組織づくりやシステムを作り上げること。
2. 地域に根ざした組織づくりや、ボランティアに支えられているライフセービング活動を参考にして、日本に取り入れること。
3. ライフセービング活動を通して、人命の尊さを学ぶと同時に、生命が危険な場合の対処法（救急法や救助法）やサバイバル技術を身につけること。

【謝辞】

本調査を進めるにあたって、サーフクラブを紹介していただいたSportstay社のDarren Wise氏、ムルーラバサーフクラブの調査にご協力いただいたChris Kelly氏に深く感謝いたします。

【参考文献・資料】

- 1) David Dale (著)・小林健・久村研 (訳) : オーストラリア100の常識, 91 - 92, 大修館書店, 1998.
- 2) 深山元良 : オーストラリアにおけるサーフライフセービング, 体育の科学, Vol.46, 753-759, 1996.
- 3) <http://www.lifesaving.org.au/>, Surf Life Saving Queensland Home Page.
- 4) <http://www.slsa.asn.au/>, Surf Life Saving Australia Home Page.
- 5) 小峯 力 : 「生命尊重」を普遍とするレスキュースポーツ ライフセービング競技の理論と実際, 体育の科学, 50 (7), 545-555, 2000.
- 6) Royal Life Saving Queensland: Annual Report 1998-1999, 1999.
- 7) Surf Life Saving Australia Ltd.: Surf Lifesaving Training Manual, 1998.
- 8) Surf Life Saving Queensland Sunshine Coast Branch: 69th Annual Report and Financial Statement, 1999.
- 9) The Royal Life Saving Society Australia: Swimming & Lifesaving, 1995.